

職業役割喪失とそこからの変化

—妊娠・出産を機に離職した人の意識—

小野智佐子

Perceived loss of career role and ensuing changes in attitude
Awareness of women who left jobs due to pregnancy or childbirth

Chisako ONO

In our previous study, 36% of women surveyed who had left their jobs due to pregnancy or childbirth expressed negative feelings about leaving work. Respondents indicated that they felt “left behind by colleagues and society”, “unsupported by their husbands”, and “unable to use time or money freely”, and that “only their husbands were self-fulfilled”. In the present study, we focused on women who reacted negatively after leaving their jobs due to pregnancy or childbirth. We used semi-structured interviews to collect data from eight of these women who consented to participate regarding their perceptions of losing their career role and subsequent changes in attitude. Qualitative inductive analysis revealed the following stages after leaving work: 1) feeling nothing; 2) feeling frustrated at being left behind; 3) having doubts about current lifestyle; 4) wanting to begin something; 5) taking action; and 6) moving toward stability while adjusting to a new role.

キーワード：職業役割喪失，認知，離職後の意識，妊娠・出産，女性

Key words: loss of career role, perception, awareness after leaving work, pregnancy/childbirth, women

I. 緒 言

近年、女性のライフスタイルの変化、社会参加を通しての自己実現意欲が高まり、年々働く女性が増えてきている。一方で、結婚・育児期に家庭に入る女性も少なくない。職業を持つことは、経済的報酬や社会的承認を得られるだけでなく、職業的発達や職業を通して自己成長につながっていく。職業は継続することによって力をつけていくわけであるが、結婚・育児期の離職は女性に職業的発達の中断がなされることになる。

職業役割喪失は、定年退職に代表されるが、最近ではリストラなどの突発的な出来事による離職も増えている。さらに女性にとって離職のターニングポイントは、結婚・妊娠・育児期が加わってくる。職業役割喪失に関する研究は、定年退職等が多く、女性の育児期の離職の役割喪失に関するものは少ない。定年退職に関する研究は、生田目による定年退職後の役割喪失がある。半構成的面接により、現象学的方法で分析した結果、定年退職の認知を①自分の生活への不安 ②帰属集団から離れる不安 ③今までの蓄積を無にする不満 ④自己実現の場を失う不

安をあげている。一般に職業役割の喪失は、否定的な感情が表に出やすく、今後の人生への不安や職業生活の悔いがみられる。中心的位置を占めていた役割の喪失は自我同一性を脅かすほど深い場合もある。

女性の離職においても職業を中断してしまうことによって、同様に喪失感の問題や、育児や家庭内役割への移行、役割適応への問題が生じることが予想される。新道¹⁾は、女性は妊娠・分娩を通して得るものと、同時に失うものつまり『喪失』を経験する。身体や物以外にその個人が、価値を置いている出来事や目標をなくす喪失がある。妊娠・出産にともなう喪失の内容を“生きがいであった仕事や人との交流”をあげている。喪失の情緒は自尊心を低下し、不適応を生じさせ、そのことは自己喪失の脅威を意味し、母親役割の実現を困難にしてしまう。女性の妊娠・出産による離職はその後に続く母親役割を引き受けることであるが母親役割への適応がスムーズにゆかないことにもつながってしまうと考える。

新道²⁾は新しい役割への適応を「役割変化を体験する過程で心理的問題が生じ、それを克服しながら情緒的に成長を遂げるが、克服に失敗し緊張が高まると新しい役割への適応が難しくなる。新しい役割を担うことは、以前の役割を放棄する一種の喪失体験であり、新旧の役割喪失との間にアンビバレンスな感情を体験することになる。」と述べている。大森らの報告³⁾においても、妊娠・出産を機に離職した女性の離職後の受けとめ方の結果は、36%が否定的な受けとめ方をしていた。その内容は“同僚や社会から取り残される”“夫から養われている感覚の辛さ”“自由な時間やお金が使えない”“夫だけが自己実現しているように思える”などであった。

セクシズムが潜む社会構造の中、弱者の訴えは注目をされにくい状況にある。女性がゆえにまた専業主婦という社会の周辺的な位置にいるそれゆえに注目されにくいことになる。そのこ

とは、必要なケアが届きにくいことにつながる。と考える。研究方法としては、解釈的アプローチを用いる。実際の経験された認知から内省的な情報を理解し、意識の変化を分析していく方法である。デイルタイによると解釈的とは、読者が作者の立場にたつことによって、「実際の経験そのもの」を表現するものであり、それは読者が作者の立場に立ったときに理解できる。人間性が共有され、精神的な絆が生まれる可能性があるがゆえに想像力が求められる仕事を完成できるものだと考える。しかし、ガダマーによると解釈が完全であることはなく、解釈的循環の過程で修正されるものである。

「当たり前と思うこと」を意識の上ののぼらせ、既に知り理解していると信じていることを再検討し、人間の本質とその意味するものとはなにかを問うことにある。さまざまなデータを内省的な対話をかなり入念に行い、内省の意味の解釈が進み、意味が明らかになっていく。

これまでのジェンダー研究の中でも、エスノメソドロジーなどによる解釈的アプローチが数多くされてきた。教師から子どもや対象者にたいするジェンダーの再生産過程や刷込のなどの実際が観察され、ジェンダーの視点で分析されてきた。参与観察では実際の事実の場面を観察できるというメリットはあるが、その人の認知や意識の変化までは、確認できにくい状況にあるということと、研究者側の一方向的な解釈で、分析されるというリスクもありうると考える。そこで、研究者が、対象者との対話を通し、対象者の立場に立つことによって、「実際の経験そのもの」が表現され、経験が共有され情緒の支援が促され、精神的な絆が生まれる可能性があるがゆえに、想像力が働き解釈がなされやすい。そのような面接の関係性を活かして、半構成的面接を行う。

Ⅱ. 研究目的

妊娠・育児期にある人が、離職に対しどのような認知し、その後どう変化していくのか。ま

た、変化の要因について知る。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究デザイン

妊娠・出産を機に職業役割喪失した女性の認知とそこからの変化を帰納的に探索する質的記述研究である。

2. 対象

妊娠・出産を機に離職し離職後6ヶ月以上を経過している女性とした。さらに離職を否定的に受け止めた経験のある女性を対象とした。

3. 方法

1) データ収集方法

研究の同意が得られた8名の女性に対し半構成的面接法によるデータを得た。面接内容は同意を得て録音をした。

2) データ収集期間

1998年9月21日～12月13日

3) 分析方法

面接で得られたデータを文脈、エピソード毎に分けテーマを命名した。テーマを概観し内容を“離職に対する認知”と“回復に関する意識の変化”と“家庭内役割の受け止め方(主婦役割, 母親役割, 妻役割)”と“性役割分業観”の4つ視点でカードを分類した。分

類したカードの同じ意味や類似した内容をグルーピングし、テーマを設定していった。その後、より中心的な認知に対しテーマを設定した。再度面接結果を踏まえ、テーマを再度検討し、離職に対する認知とその変化についての要因と、回復プロセスの特徴を検討した。

4. 倫理的配慮

本研究の主旨および目的、方法について説明し、プライバシーの保護、自由意志による参加、拒否する権利を有することを説明した上で、同意の得られた者のみを対象とした。

Ⅳ. 結 果

1. 対象の概要

対象の概要は表1に示すとおりである。

対象の年齢は、26歳から37歳であり、平均32.75歳であった。夫の年齢は、30歳から38歳であり、平均35.0歳であった。

就業年数は、4年～10年であり、平均6.31年であった。離職の理由は、「出産のため」5名、「両立困難」1名、「育児に専念」1名、「結婚のため」1名であった。家族形態は核家族が6名、残りの2名は複合家族であった。子どもの数は1～3人であり、平均2.1人であった。住居形態は集合住宅が6名、一戸建て2名であった。

表1 対象の概要

対象	年齢	職業	期間	離職理由	家族形態	夫の年齢と職業	子の数	住宅形態
A	31	会社員	5	出産のため	核家族	31歳/会社員	1	集合
B	37	会社員	8	出産のため	核家族	38歳/会社員	2	集合
C	35	看護師	4.5	結婚のため	核家族	36歳/会社員	2	集合
D	26	サービス業	4	出産のため	核家族	36歳/会社員	2	集合
E	35	公務員	10	両立困難	複合家族	37歳/公務員	3	一戸建
F	31	派遣会社	5	出産のため	核家族	37歳/自営業	2	集合
G	32	助産婦	4.5	育児に専念	核家族	30歳/会社員	2	集合
H	35	美容師	9.5	出産のため	複合家族	35歳/会社員	3	一戸建

2. データの概要

1) 面接に要した時間

面接に要した時間は29分～52分であり、平均43分であった。

2) 面接場所

面接場所は希望を聞き8名全員対象の自宅の居間で行なった。時間帯は対象の都合に合わせて行なった。日中、対象の子が幼稚園や小学校に行っている間であったり、幼稚園に行っていない場合は、面接の場に子どもを同席した中での面接であった。

3. 各事例の面接結果の概要

【事例A】

離職に対する受け止め方は、離職直後は妊娠異常で大変さもあって何も感じなかった。その後第1子出生後半位経過し、寂しさと疎外感を感じていた。その後「何かしなくては」と焦りを感じ夫に相談した。夫は私にとって対等であり、話し合えると捉え、夫婦の関係も良い。夫から情緒的な支援も得られていた。そのため夫の合意を得て在宅で出来る仕事を開始することになった。行動としては、求職関係の雑誌を見たりインターネットで仕事を探した。始めはなかなか仕事が見つからず苛立ちもあったが少しずつ見つけ仕事を開始した。その時の気持ちを社会とつながりが出来て嬉しかった。「自分のやることを見つけた」「自分の居場所が出来た」と仕事を通して喜びが増していった。今後も在宅の仕事を続け、少しずつ増していくつもり。子どもが幼稚園に入園しパート勤務で働き小学校入学後、子どもの成長にあわせ常勤で働く予定であり、子育てと両立しやすい働き方を考えていた。私にとって子育ては一番ではないし、子どもには賭けていない仕事を通して社会参加していきたいと言う。

【事例B】

離職に対する受け止め方は、離職直後は育児を楽しみ多忙で何も感じなかった。しかしその後「寂しい」と疎外感を感じていた。特に第2子が1歳になった後強く感じていた。その時の相談相手は実母であった。第2子が1歳になった頃になると働きたい気持ちが強くなる。自分には育児は合わない。働いていた時が自分らしかったと思い、益々働きたい欲求が強くなっていった。日頃は夫に対する家庭内の協力度が少ないことに不満を抱いている。家庭を振り返らないし、部屋に閉じこもりパソコンばかりしていると語り、ほとんど夫と話し合うことはないと言う。子どもに手がかかる今は、一定の期間の我慢と受け止めている。しかし「仕事関係の情報が気になり、見ないようにしているがついてしまう」とB氏は求職情報に関心がある事を自覚していた。再就業希望である。働いていた過去の自分に戻りたいと言う反面、今の時期は再就業できないとがまんしていた。また夫の家庭内協力への不満をつのらせているが話し合いはもてないままだった。

【事例C】

C氏は元々の家庭に入る予定であった。離職直後は、妊娠悪阻による体調不良があり、母親役割の変化と受けとめており特に寂しさは感じなかった。「主人には何でも相談するし、オープンにしている」と、夫との関係も良好であり、日頃の感情の表出もでき夫から情緒的支援も得ていた。夫と同じ社会活動をしており、一緒に活動を通して満足していた。家庭での役割においては、時々不満を感じるが夫にその都度ぶつけていると言う。当分の間は育児を楽しむ予定である。下の子の手が離れたら就業したい希望をもっていた。

【事例D】

離職直後の受け止め方は、妊娠の事が不安で何も感じなかった。その後は、「出産前に寂しさはそれなりにあった」また出産し育児してい

る現在でも「社会から取り残されている。世間に疎くなっている。空間が止まっている」と疎外を感じていた。夫との関係は悪くはないが、夫の帰宅が遅く家庭内の協力は十分でないと受けとめている。また「母親としての自分ではなく一人の人間としての自分を認められたい。」と自己の存在を認められていないと感じていた。今後子どもの手が離れ再就業を希望していた。「今度就職する時は成長できる職場を選びたい。」と語る。しかし再就業の具体的な予定はない。

【事例E】

離職直後は、仕事を辞めてよかったと受け止めていた。しかし友人が復職をしたことを聞くと羨ましさと離職の後悔を感じ、寂しいと感じていた。夫には仕事と育児の両立困難の辛さを理解してもらえなかったと受け止めていた。その後本人の働きかけもあり、夫や姑が変わってきた。「単独で外出する時、家事を代行してくれ、次第に単独の外出を遠慮しなくなった」など夫や姑の協力が得れるようになった。家庭生活の不満はなくなったが、自分が社会的に不安定な位置にいることを不満に感じていた。しばらくは育児に専念し、子育てを楽しみたい。仕事の内容にはこだわらず将来再就業予定であった。

【事例F】

離職直後の受け止め方は、何も感じなかった。しかし妊娠中時間を持て余し、次第に「寂しさ」を感じ始めた。「同僚からどんどん取り残される」「海外旅行や遠出ができず自由がなくなる寂しさ」を感じていた。夫との関係は大きな問題ないが、夫や姑は妻が働いてほしいと思っており、そのことに強く不満を抱いていた。「夫や姑は自営を手伝う事を期待している」。今は育児に専念したい希望があり、新しいことをしようとは考えていなかった。今後は「社会と関わり、母親でない自分を確認したい」と自

己の存在価値を確認したい欲求をもっていた。

【事例G】

離職直後の受け止め方は、産休に入り時間をもて余し気味で「人のために何もしなくなることが寂しく感じた。反面、仕事を辞め気持ちがリラックスできよかった。」と受けとめていた。その後は次第に出産や育児に関心が高まり、育児を楽しむようになった。しかし夫が家庭内役割への協力が無いことに不満を抱いていた。「夫は私が辛くても解らないらしく手伝ってもらえない」「夫と話し合いを持とうとするが、夫の方が持とうとしない」と夫との関係には満足していないが、育児や家庭内役割には満足していた。今後の予定は、「経済的に苦しくない限り、働く予定はない。家庭にしわ寄せがくるので。」自身を家族の安定した生活のためにいると位置づけていた。

【事例H】

離職直後の受け止め方は、出産や育児が大変で何も感じなかった。その後第2子の育児にゆとりが持てた時「世間から取り残されている」「家庭にいることは、行動も思考も狭くなる」と感じていた。夫や他の家族メンバーにも不満を抱き「夫は帰宅も遅く家庭で顔を合わせる時間も少ないし話す暇もない」「同居世帯から独立し、夫婦としてやり直したい」と義父、義母との同居生活からの独立を強く願っていた。「女は全てにおいて損である。女と気にせず行動したいが周囲が許さない」と語り女性の役割に対してでも不満を抱いていた。また働くことが自分らしい生き方ができると考えていた。

4. 4つの視点で分類した結果

面接結果を踏まえ、“離職に対する認知”と“意識の変化”“家庭内役割の受け止め方（主婦役割、母親役割、妻役割）”と“性役割分業観”について以下のとおり分類した。

1) 離職に対する認知

- ・仕事を辞めて、始め何も感じなかった。
- ・社会から取り残される寂しさ不安。
- ・子育てから手が離れた感じがすると、周囲が気になっていった。

2) 意識の変化

- ・主婦より仕事している方が認められていた。
- ・仕事をしていた時の自分にもどりた。
- ・子どもの手が離れたら将来は働きたい。
- ・今は仕事する時期を待っている、我慢している時期である。
- ・子どもが大きくなったらパートから仕事を始めたい。
- ・本格的に会社に入るのは、かなり難しいと思う。
- ・再就業は困難さと不安が伴う。子どもがいれば非常勤しかできない。
- ・このままの生活でいいのかなーと思う。
- ・子どもの母親としてではなく、個人としてまた仕事を通して認められたい。
- ・仕事を始め自分のやることを見つけた

3) 意識の変化の要因

〈主婦役割〉

- ・主婦業で“認められている”と実感することとはほとんどない。
- ・主婦の立場は不安定で評価が低い。
- ・主婦は暇と思われ主婦業は全部やれて当たり前に見なされ大変不満。
- ・家事をやってしまっただけに確かに暇な時がある。
- ・主婦は暇がないし本を読む暇があったら家の中のことをやる。
- ・家事は常に連続し終わりが無いが認められない。

〈母親役割〉

- ・母親業は“認められない”強いて言えば“子どもの反応”くらい。
- ・家庭にいて、家事と育児をおこなうのはかなりのストレス。
- ・育児は楽しくない、また子育ては自分には

合っていない。

- ・働いてストレスのない状態で、育児をした。
- ・育児は子供と一緒に成長できる。
- ・“子どもといえることは楽しい”
- ・育児は楽しくない大変なばかり。
- ・私の中で育児が一番ではない。
- ・一人での行動できず自由はない。

〈妻役割〉

- ・夫から育児・家事の事言われると不満
- ・働いていないことは弱いし主婦業は手伝ってもらえない。

4) 性役割分業観

- ・家族は家の事を全部やるのが、当然と思われる。
- ・今、育児は我が子のために私がやるもの。
- ・子どもを見るのは自分しかいない。
- ・育児と家事を行うことは大変。家庭の事をもっと協力して欲しい。
- ・共稼ぎであれば、家事をある程度やってももらえるだろう。
- ・女性は男性のように稼げない。

5. 妊娠・出産による離職直後の認知と、その後の変化について

1) 離職直後の認知

妊娠・出産による離職直後の認知とその後では違いがみられた。「初めは何も感じなかった」「何も思わなかった」「妊娠や出産のことで頭がいっぱいで、それどころではなかった」と受けとめていた。対象の多くが、離職直後には何も疑問に思わなかったと受け止めていた。その要因は妊娠、出産による離職は女性にとり自然な成り行きであると受け止めていた。また育児と就業の両立困難な時期であることから当然であると受け止めていた。離職後、時間が経過した後、社会から取り残される寂しさなど「疎外感」や「不安感」の存在があった。事

例A、B、D、F、G、Hから表現されたように、「社会に疎くなる、時間が止まっているようだ」「世間に取り残されているようで寂しい」などであった。このような否定的な感情を抱く時期の特徴は、離職直後ではなく、一定の時間の経過を経た後であることがわかった。事例Cのように離職後2～3ヶ月であったり、事例Aのように、子どもが生まれて6ヶ月頃であった。事例BとHは、第2子の妊娠がすぐ続き、第2子が1歳過ぎて否定的な感情を抱いたと表現していた。全体に共通するのは子どもの手が離れた後であり、育児に多忙でなくなった時期であった。

2) その後の意識の変化について

面接結果より「主婦より承認されている仕事をしたい。」「主婦は評価が低く認められていない。」「孤立しているため社会につながってほしい。」「このままでいいのか不安」「母親でなく個人として認められたい」「自分の時間が持てたら、自分のしたいことを行いたい」と表現していた。

自分自身の他者や会社から承認されない未充足感を感じ、社会参加を通して自己成長の欲求があることが伺えた。早期に再就業希望の事例BとHは、「早く仕事したい。今は待っているだけ」「家を出て早く仕事したい」と表現し、再就業の時期を待ち我慢していた。

3) 以上の事柄を時間の経過のなかで整理すると妊娠・出産による離職直後の認知と、その後の変化には、①疑問を感じない時期②これでよいのか焦燥感を感じる時期③今の生活に疑問や不満を持つ時期④折り合いをつけていく時期⑤行動を起こす時期の存在が確認できた。

V. 考 察

妊娠・出産による離職の受け止め方とそこからの変化を分析した結果5つの段階が確認された。①疑問を感じない時期②これでよいのか焦

燥感を感じる時期③今の生活に疑問や不満を持つ時期④折り合いをつけていく時期⑤行動を起こす時期が存在していた。それぞれの時期の変化とその要因について考察する。

1. 疑問を感じない時期

妊娠、出産による離職直後は、疑問を感じない時期が存在した。離職は女性にとって自然な成り行きであると受け止めていたり、育児と仕事の両立困難から仕方がないと受け止めていることから母親役割移行にともない離職を自ら引き受けていると考える。これまで職業生活上の時間的制約や人間関係上の悩み、負担感、キャリア上の悩みから解放された安堵とさらに今後の生活への期待感が上回っていることが影響していると考ええる。これまでの生活から新しい生活の変化に関心が示されるため離職に疑問を感じない時期の存在があるのだと考える。

2. これでよいのか焦燥感を感じる時期

妊娠、出産による離職後ある一定の時間を経過した後、社会から取り残される寂しさなど疎外感や不安感が認められた。このような感情を抱く時期は、離職後2～3ヶ月から数年後という者まで時間の幅があった。特徴的なのは子どもの手が離れた時であった。

疎外感や不安感は、離職後、時間の経過の中で職業人だった頃の自己の存在や社会的に承認されていた頃の自分を想起し現在の生活と比較していることからくる感情であると推測する。

3. 今の生活に疑問や不満を持つ時期

「今のままでいいのか」「子どもの母親としてだけでなく認められたい」と自分の存在に疑問を持っていた。子どもの成長とともに生活が変化するが自己の存在は変わらないことに疑問や不満を抱いていた。また多くが自尊心の低下を示す「夫から養われてる感覚が辛い」、「社会からとり残されてしまい不安」などの表現が認められた。岡本は母親役割を通して自己確立感、

安定感を得ることは少なく、家庭内役割がアイデンティティの基盤として認識されなかった。また家庭にとどまることがある種の葛藤を引き起こしている。一方有職婦人は職業を通して自己確立感、安定感を得ており、職業はアイデンティティの安定した基盤となりうるとされる⁴⁾。自尊心の低下が自己のアイデンティティの揺れまた職業役割は、職業が意味する社会的使命に組織が運営され、職場の一員である個人が就業する事で組織目的が達成されていく⁵⁾。社会的な使命や目的をもつ組織に所属し、組織からまた社会的な保障を受けながら、社会的な支援や周囲の支援を受け成り立ち安定している感じを受けるのではないかと考える。一方、子が小さく手がかかる期間は人間関係の縮小もあり、直接的に社会に貢献している感覚の乏しさや社会から保障されている感覚の不安定さがあると考ええる。事例の多くが「主婦は職業人に比べ評価が低い、不安定な立場にある」「主婦は認められない」などからも、周囲からの承認のなさ、孤立感の経験を通し「承認されない立場」を意識がしていくと考える。自分自身の評価と他者との評価とのずれや葛藤の結果、このような不安感、焦燥感、無力感などの情緒を経験し、自尊心を低下させていると考える。

4. 折り合いをつけていく時期

事例A、C、Eは、現状を変えたいという動機から夫と話し合いを持っている。事例Aは、在宅で育児しながらできる仕事を開始することを夫に了解を得ていた。事例Cは、子どもの成長にあわせて可能な社会活動を見出し夫とともにに行っていた。事例Eは、感情を家族にぶつけ自分の時間を確保していった。このように女性一人で行動するのではなく、夫や家族の了解を得て新しい生活の変化が成立するものだと考える。夫婦間の話し合いや家族間の話し合いを重ねながら折り合いをつけていると考える。

5. 行動を起こす時期

在宅で出来る仕事を始めたA氏「自分のやることが見つかったと思った」「社会につながりができたと感じ嬉しかった。」「居場所ができた」と語っているように、試行錯誤しながら仕事を獲得し満足を感じていた。また、仕事を通して、自分の存在価値を確認していた。事例Aの場合「子どもは成長するが自分は成長しない」もともと自己成長欲求があり、行動を起こしてきたという自己効力感と自信を得ていた。事例Cの場合は、夫に何でも相談してみる。そのことが行動化に繋がりがやすかったのではないかと考える。事例Eも、夫とよく話し合っており、互いに自分の時間を持つことは大切である。それぞれを尊重し合っていることが、行動を起こしやすさに繋がっていたと考える。

以上、意識の変化を促す要因は、夫との「良好な関係」と夫との「話し合い」の上で行動が開始できていた。一方、B氏のように強い仕事開始希望があっても、夫との関係が悪かったり、夫と話し合いがなされにくい場合は行動の開始に至っていなかった。意識のうえでは「性役割分業観」との葛藤を生じやすい。しかし反面、行動の面では強調されやすいことになっていると考える。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は対象数が8名と少なく、離職後の期間が限られているため妊娠・出産を機に離職したものの意識の変化を明らかにしたとはいえない。今後対象数を増し、離職後の期間を広げさらに検討する必要性がある。また質的帰納的分析のみであり、女性を取り巻くサポート状況や喪失感のみの度合いなど関係などは調査していない。そのため定量的評価も含め複数の方法論的トライアングレーションを用いて検討する必要があると考える。

VI. 結 語

妊娠・出産を機に離職し離職後6ヶ月以上を経過した者の中で、離職を否定的に受け止めた

経験のある8名の女性を対象に、半構成的面接法を用いデータを獲た。質的帰納的分析をおこない職業役割喪失に対する受け止め方とそこからの変化を検討し以下の事柄が示唆された。

1. 妊娠・出産による離職後の認知は、①何も思わなかった②社会から取り残されていく焦燥感を受ける時期、③疑問や不安をもつ時期 ④何か開始する時期 ⑤行動を起こす時期の5つが認められた。

2. 妊娠・出産による離職後の認知の変化に影響がある要因は、夫や家族との関係、性役割分業意識への不満が存在した。

(謝辞：稿を終えるにあたり、本研究にご協力いただきました対象の皆様にご心より感謝申し上げます。)

引用・参考文献

- 1) 新道幸恵, 喪失体験および悲嘆と援助, 助産師雑誌40(7), 1986
- 2) 新道幸恵, 和田サヨ子編, 母性の心理学的側面の看護ケア, 医学書院, 1997, p 51-52.
- 3) 大森智佐子, 妊娠期の女性の職業意識調査, 母性衛生, 1997, 38(3)
- 4) 岡本祐子, 女性の生涯発達とアイデンティティー 個としての発達・かかわりの中での成熟, 福村出版, 1998
- 5) 岡本祐子, 松下美和子, 女性のためのライフサイクル心理学, 福村出版, 1999
- 6) 財団法人21世紀職業財団, 労働白書一働く女性の実情一, 1998
- 7) ぎょうせい, 厚生白書, 家族と社会保障, 1996
- 8) 日本労働研究機構, 女性従業員のキャリア形成意識とサポート制度の実態に関する調査, 1992
- 9) 松下美和子, 人生の正午, 女性のためのライフサイクル心理学, 福村出版, 1999, p 18
- 10) 関山旬一, 青年期からの自己実現, ナカニシヤ出版, 1996, p 104-105
- 11) 岡堂哲雄, 鈴木志枝, 危機的患者の心理と看護, 中央法規出版, 1993, p 45
- 12) 井上輝子, 江原由美子, 女性のデータブック, 有斐閣, 1999